２０１９年１２月（第４３号）

Design

山城ケア病棟　検索

上記で検索ください。

～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟“彩り”での傾聴ボランティアの方々の活動について

～ 認知症患者さんの安心感という居場所 ～

昨年６月より地域包括ケア病棟“彩り”では、傾聴ボランティア「うさぎ」の方に週１回の頻度で活動して頂いています。

今年７月、他病院から受け入れした患者さんですが、傾聴ボランティアの方に定期的に関わって頂いています。その患者さんは認知症があるのですが、傾聴ボランティアの方との関わりの中では、以前されていた畑仕事や息子さんのことなど、様々なことを語って下さっています。話をされた後は、表情も明るく穏やかに過ごされることが多く、この患者さんにとって傾聴ボランティアの方の関わりが有意義であることを実感しています。

認知症のため、何度も同じことを繰り返されることもありますが、傾聴ボランティアの方が時間をかけ、丁寧にお話を聴いて下さっていることが、この患者さんの安心感という“居場所”に繋がっているのではないでしょうか。引き続き、傾聴ボランティアの方のお力をお借りし、患者さんの入院生活に彩りを添えられたらと思っています。（地域医療連携室 室長 南出　弦）

老健やましろより

～ 老健やましろ「ふれあい広場」を開催しました ～

老健やましろでは、地域のみなさまに老健をもっと身近に感じ、広くご利用していただけるよう、１０月２６日（土）に『老健やましろ　ふれあい広場』を開催しました。今回は、木津川市の認知症キャラバンメイトの方々のご協力を得て、「相手の立場に立って物事を考えられるやさしい人になりましょう」というテーマで、『認知症サポーター養成講座』を実施させていただきました。

はじめに、岩本施設長が認知症についての講義を行い、その後、参加者が認知症の方の行動とその対応についてロールプレイを行い、受け答えの仕方によってどのような気持ちになるのか、どのように気持ちが変わるのかを疑似体験しました。皆さん即興とは思えない名演技で、会場は笑いに包まれる場面もありました。

最後の意見交流の場では、参加者の方から、人との関わり方について「認知症のあるなしに関わらず、『人として人と接する』ということが大切だと感じた。」「笑顔でゆっくり対応することの大切さを再認識した。」等の感想があり、また、自身の介護体験等を話し合う場面もみられるなど、大変有意義な時間を共有することができました。

ご参加いただいた皆様、ご協力いただきました木津川市認知症キャラバンメイトの皆様、大変ありがとうございました。（老健やましろ 管理部長 三村　裕子）

地域包括ケア病棟“彩り”主催　『秋祭り』を開催しました。

１０月２９日（火）午後、地域包括ケア病棟“彩り”主催　『秋祭り』を開催しました。皆さん、にこやかに楽しい時間をお過ごしになられていました。詳細は改めてお知らせします。

地域医療連携室より

～ 全国自治体病院協議会主催のワークショップが開催されました ～

１０月２２日（祝）、当院で全国自治体病院協議会主催のワークショップが開催されました。お忙しい中、ご参加頂きました地域の専門職の皆様にはお礼申し上げます。

「医療から在宅医療・介護への移行のための円滑な退院支援」というテーマで開催された今回のワークショップですが、先生方によるご講演の後、地域の専門職の皆様と当院の職員が参加したグループワークを行いました。グループワークのテーマは「病院医療職として円滑な退院支援・在宅支援移行にできること・せねばならないこと」です。各々が経験した、“うまくいかなかった事例”と“うまくいった事例”を付箋に記載し、ホワイトボードに貼っていきました。日頃の連携や医療側への要望など率直な意見を聴かせて頂き、また、グループ発表もありましたので、それぞれのグループで出た意見を参加者皆でシェアすることができました。参加した当組合職員２０数名各々が、連携などについて改めて考えるきっかけとなったのではないでしょうか。

＊

翌日、地域医療連携室内で、今回のワークショップの振り返りをしました。「大袈裟なものではなくても入院中の経過を在宅側と共有する“中間カンファレンス”を実施してはどうか」、「改めてこのようなグループワークをする機会を設けてはどうか」などの意見が出ました。今後、各々が感じたことを地域医療連携室として患者さんの支援に活かせるよう、ラグビー日本代表のようにチーム力を高めていきたいと思っています。（地域医療連携室　室長　南出　弦）